

第6学年 社会科学習指導案

山形県上山市立南小学校 太田 馨

1 単元名 町人の文化と新しい学問

2 単元の目標

- (1)世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などについて、文化財や年表、その他の資料で調べ、歌舞伎や浮世絵、国学や蘭学について理解することができる。【知識及び技能】
- (2)世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産など着目して、問いを見出し、このころに栄えた町人の文化や新しい学問を生み出した人物の業績を考え、適切に表現することができる。【思考力、判断力、表現力】
- (3)歌舞伎や浮世絵、国学や蘭学について、予想や学習計画を立てたり、学習を振り返ったりして、学習問題を追究し、解決しようとする。【学びに向かう人間性】

3 本単元の指導にあたって

(1)児童について

本学級の児童は、社会科の学習では、人と人・人とモノ・モノとモノ、それぞれのつながりを意識して捉えることができる児童が多くいる。

本単元の前の単元「江戸幕府と政治の安定」の学習では、江戸時代の黎明期の学習を行った。そこで、児童たちは、「なぜ、260年もの間、江戸幕府は平和な世の中を作れたのだろうか」という課題を設定し、幕府による意図的な大名配置や武家諸法度、身分制度の確立を学んだ。それぞれが、大名を統制したり、庶民の身分を固定したりすることが、争いのない世の中づくりにつながっていることに気付くことができている。

その一方で、児童は「そのようにしてつくられた世の中は、本当に平和だったのか。」「幕府が作った決まりだけで大名が取り潰されているし、私が当時の人々だったら、不満に思うかもしれない。」「結局、この時代の『平和』は、『徳川にとっての平和』だったのではないか。」という見方の意見ももつようになった。当時の社会の価値観と現代に生きる児童の価値観との間には齟齬があることを鑑みつつも、当時の社会での出来事と自分たちのくらしとのつながりを捉え、かつ、「平和」について考え始めていることがうかがえる。

今を生きる自分たちが歴史から学ぶ、ということが少しずつできていると考えている。

(2)題材について

本単元は、学習指導要領の内容(2)-ア-(ク)、(シ)及び(2)-イ-(ア)を受けて設定された単元である。

日本史の中でも、江戸時代の中期から後期を扱う。この時代は、江戸幕府によって構築された社会体制が日本全国に根付き、安定してきたころと言える。そのことにより、争いが無い、という意味での「平和」が訪れたと捉えられる。

そのような社会で、庶民の生活に目を向けると、次第に庶民が自立してきていることもうかがえる。例えば、歌舞伎や浄瑠璃といった文化や、国学・蘭学などの学問の発展が挙げられる。それらは、町人などの立場から次第に湧き上がって形成されていき、かつ、多くの人々に受け止められて拡大・発展していった。庶民が自ら文化を作ったり、学問を発展させたりしているところから、庶民が力をつけ、自立してきたと考えられる。

そのようにして庶民が力をつけてくると、次第に江戸幕府の体制に疑問をもつ者も出てくる。その代表例として、大塩平八郎の乱が挙げられる。天候不順などによって凶作に陥った農家を尻目に、米を隠していた米問屋などを襲撃した事件である。このことから、庶民が自ら行動を起こすところまで力をつけてきたということがいえよう。

上山市でも、比較的大規模な一揆がおきている。代表的なものが「見ル目原百姓一揆」である。これは、1747年、それまで数年続いた冷害凶作で米価が暴騰した際、町の方で隠し米を所有していた有力な商家を襲うという打ちこわし騒動に続き、農民によって画策された一揆である。上山市・見ル目原には3000人の農民が集結し、15の要求を藩に突きつけんとし、一揆を起こそうとした。だが、上山藩家老山村縫殿助（やまむらぬいのすけ）らの活躍により、要望が受け入れられた。この時代、要望が受け入れられることは例を見ない出来事であった。だが、ここで一段落とはならず、一揆の首謀者5名は処刑される。この5名を偲び、時代が変わった明治・大正時代に「五巴神社」が建てられた。

この時代、一揆を起こした際の処刑は免れない。それでも何とかして自分たちのくらしを良いものになりたい、「正しさ」を追い求めたいというエネルギーが、一般の民衆にも湧き上がっていたことがうかがえる出来事である。その点で、当時の社会状況を具体的に理解するのに適した教材であると考えられる。

(3)指導について

本単元では、まず、教科書・資料集を中心に、江戸時代中期から後期にかけて江戸や大阪を中心に町人が文化を作り上げたり、学問を発展させたりしていたところを把握したうえで、児童が住む上山市に目を向けさせ、自分たちの地域でもそれまで学んできたような社会状況であったことを捉えさせたい。そうすることで、世の中が平和になっていくに従って次第に庶民が力をつけてきたことを把握したうえで、当時の上山市の出来事も庶民の力の発揮という視点で捉えられるようになることを狙っていく。そして、地域で暮らす庶民と政治を行う幕府・藩とのつながりを把握し、「みんなが幸せになるためにはどのようなことが大切か」を児童が考えられるようにしていきたい。

(4)ESD との関連について

1.この題材で主に働かせる ESD の視点

- 相互性：それぞれの立場の人がつながり合って社会が形成されている。
- 公平性：どの立場の人も幸せに生活することができる。

2.主に育てたい ESD の資質・能力

- クリティカルシンキング

現在の社会状況を鵜呑みにせずに、課題を捉え、解決していこうとする力

- システムズシンキング

政治を行う側の人間と、庶民との間のつながりを理解し、よりよいシステムを考える力

3.変容を促したい ESD の価値観

- 世代内の公正

どの立場の人も幸せな生活を送ることを目指す

- 人権・文化を尊重する

どの立場の人のくらしも尊重されるような社会づくりを目指す。

- 幸福感に敏感になる。

それぞれの立場の人々が幸せになるにはどうしたらよいかを考える。

4.達成が期待される SDGs

目標 10：各国内及び各国間の不平等を是正する。

目標 11：包括的で安全かつ強靱で持続可能な都市及び人間居住を実現する。

目標 16：持続可能な開発のための平和で包括的な社会を促進する。

4 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
<p>①世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などについて、文化財や年表、その他の資料で調べ、歌舞伎や浮世絵、国学や蘭学について理解することができている。</p> <p>②上山で起きた打ちこわしや一揆について、人物の動きや関係性などを理解することができている。</p>	<p>①世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産など着目して、問いを見出し、このころに栄えた町人の文化や新しい学問を生み出した人物の業績を考え、適切に表現することができている。</p> <p>②上山で起きた打ちこわしや一揆について、なぜ百姓は打ちこわしや一揆を行ったのか、より平和的な解決をするにはどうしたらよいかを考え、表現することができている。</p>	<p>①歌舞伎や浮世絵、国学や蘭学について、予想や学習計画を立てたり、学習を振り返ったりして、学習問題を追究し、解決しようとしている。</p> <p>②上山で起きた打ちこわしや一揆について、予想や学習計画を立てたり、ゲストティーチャーから話を聞いたりするなどして学習問題を追究し、解決しようとしている。</p>

5 単元指導計画(全7時間扱い)

時	○学習活動 ・児童の発言	学習の支援 指導上の留意点	評価
<p>【前単元までの子どもの捉え】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・争いはなかったけど、江戸幕府の政治が行われた世の中は、本当に平和だったのか。 ・幕府が作った決まりだけで大名が取り潰されているし、私が当時の人々だったら、不満に思うかもしれない。 ・結局、この時代の「平和」は、「徳川にとっての平和」だったのではないか。 			
みつめる ①	<p>○これまでの江戸時代の学習を振り返り、今後の学習の見通しを持つ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とりあえずは、平和な時代になったんだよね。 ・ここから大体160年も平和な時代が続くんだ。 ・え、でも、江戸幕府は約260年も続いたのに、どうして滅んでしまったのだろうか・・・。 	<p>それまでの資料等を掲示し、時代背景を思い出せるようにする。</p>	
	<p>問い なぜ、江戸幕府は260年も続いたのに、滅んでしまったのだろうか。</p>		
	<p>○歌舞伎、人形浄瑠璃の動画や浮世絵、伊能忠敬作成の地図を見る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これは何だろう？ ・江戸時代が滅びることにどうつながるのかな・・・？ ・そもそも、どうやってこの文化や学問ができたのかな？ 	<p>歌舞伎や人形浄瑠璃の動画、浮世絵の画像や伊能忠敬作成の地図の画像を見せ、庶民が力をつけていき、江戸時代体制が崩れていくことへの道筋をつける。</p>	
<p>問い① どのようにして、歌舞伎や人形浄瑠璃のような文化は生まれたのだろうか。</p>			
しらべる ④	<p>○近松門左衛門や歌川広重について調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二人とも、幕府で偉い人とかではなかったんだね。 ・街中の人が文化を作って、それが庶民に広がっていたんだね。 ・庶民の人たちが、文化を作るのはすごいな。 	<p>ワークシートを用意し、基本的な知識が把握できるようにする。</p>	<p>アー① [ワークシート]</p>
<p>問い② どのようにして、この時代の学問は生まれたのだろうか。</p>			
	<p>○杉田玄白や伊能忠敬、本居宣長について調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この人たちも、もともと偉い人ではなく、むしろ庶民寄りの立場の人だったんだね。 ・解体新書づくりも、地図づくりも、長い年月がかか 	<p>ワークシートを用意し、基本的な知識が把握できるようにする。</p> <p>町人を中心として、庶民が力をつけてきたことに目を向けさせる。</p>	<p>アー① [ワークシート]</p>

っているんだね。この人たちのエネルギーがすご

【子どもの捉え】

- ・平和だからこそ、庶民が文化を創ったり、学問を深めたりする余裕ができています。
- ・庶民が力をつけ始めている。

問い③ 力をつけた庶民は、どのように行動していったのだろうか。

- 大塩平八郎の乱について調べる。
 - ・民衆の不満を行動に表したんだ、すごいなあ。
 - ・段々と、庶民の力を幕府や藩は抑えきれなくなってきたのかもしれない。
 - ・米問屋などを襲うぐらい、庶民にエネルギーがあったんだなあ。
- 五巴神社の写真及び説明書きを見せる。
 - ・上山でも一揆があったんだなあ。
 - ・どんなことに不満を持ったのだろうか。
- 「見ル目原一揆」の概要について調べる。
 - ・3000人も人が集まったんだ。
 - ・実際にはこの3000人は打ち壊したりはしていないんだね。
 - ・もっと詳しく調べたいなあ。
- 「見ル目原一揆」について、上山で歴史を研究している荒木先生に教えてもらう。
 - ・一揆の要求は受け入れられたけど、農民のため、というわけではなく、藩の中での都合もあったんだね。
 - ・当時のルールとは言え、処刑されてしまうのは納得いかない。本当に平和な世の中だったのか・・・。
 - ・本当に、このあとのくらしは良くなったのかな。
 - ・庶民が力をつけてきて、段々と幕府も抑えきれなくなってきたから、江戸幕府が減じる方向に進んでいったのかな。



ワークシートを用意し、基本的な知識が把握できるようにする。大塩平八郎の乱を学んだ後に、上山でも同様の事件が起こったことを伝える。

五巴神社の写真や説明書きを見せ、上山での打ちこわしや一揆のあらましを説明する。

百姓側の要求などを現代語訳した資料等を提示する。

荒木先生に、当時の一揆の様子を藩側と百姓側のそれぞれの立場や思いなどがわかるように説明してもらう。百姓側の不満を主張しようとした動きがあったこと、それだけのエネルギーがあったことに特に目を向けさせる。

アー①
【ワークシート】
イー①
【発言】

アー②
【ノート】

アー②
【ノート】

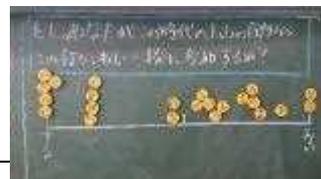
アー②
【ノート】

問い④ あなたなら、この百姓一揆に参加するだろうか

- これまでの学習を踏まえて、自分なら上山の打ちこわし・百姓一揆に参加するかどうかを考える。
 - ・僕はしたい。何か行動しないと、ずっと自分たちに不利なままだから。
 - ・私はしない。処罰されるのが怖いし、それなら我慢してしまう。
 - ・結局、藩の側も変わっていかないと、本当に平和にはならないのではないかな。

ふかめる
①

黒板にスケールチャートを記入し、児童一人ひとりの立ち位置を明示できるようにする。



イー②
【ノート】
【発言】

【子どもの捉え】

- ・幕府が作ってきた平和な世の中の中でも、不満をもって生活している庶民がいる。
- ・このような庶民の動きが少しずつ江戸幕府の体制が崩れていくのかもしれない。

問い⑤ 江戸時代は、本当に「平和」だったのだろうか。

ひろげる①

○これまで学習してきたことを通して、江戸時代は本当に平和だったのかを考えよう。
・やはり、徳川氏や藩にとっての「平和」が実現しただけで、庶民にとっては本当に平和だったのだろうか。
・でも、徳川氏がいたから、庶民も争いのない中で商売などをできたりしたから・・・。
・どんなことが「平和」につながるのかな・・・。

歴史的事実を学ぶだけでなく、歴史から世の中の仕組みや平和について考えることで、ESDの価値観を養うことにつなげられるようにする。

イ-①, ②
【ノート】

【子どもの捉え】

- ・平和な世の中を創るためには、「みんなにとっての平和」を目指していく必要がある。誰かの価値観だけで決めたのでは、幸せになれない人がいる。
- ・いろんな立場の人を尊重し、みんなが平和な世の中にしていきたい。
- ・平和な世の中づくりのために、自分から行動しなくてはならない。

※次の大單元である明治維新の学習に大きな問いをつなげていく。

【成果と課題】

①成果について

●地域教材やゲストティーチャーに触れるということ

これまで、歴史の学習は主に「日本史」を扱ってきた。なるべく今を生きる子どもの感覚につながるような配慮はしたものの、興味関心をもてない子どももいた。だが、今回は「日本史」学んだ後に「上山史」を学んだことで、「上山にも打ちこわしや一揆があったんだ・・・!」「百姓の人も、日々おなが空いて、怒りが収まらなかったんだろうな・・・。」など、当時の人々のくらしにより寄り添って学ぶことができた。また、ゲストティーチャーの方との交流（今回は、コロナ禍のためにビデオによる交流）を行うことで、教室の外へと視点を広げ、かつ、より実感を伴って当時の社会情勢を学ぶことができたと思う。

●歴史の学び方の力の向上

これまでの歴史学習では、人物や出来事の暗記だけでなく、その時代の社会全体の様子や価値観に着目して学んできた。先人たちの生き方や社会の様子を理解することで、これからの社会を作っていくためのヒントにしてほしいと考えたからである。今回、このようにして地域の教材を取り上げることで、前述のようなことを意識した学びをさらに深めることができたと思う。自分たちが住む地域にも以前は一揆や打ちこわし等があり、その出来事から、本当の意味での平和とは何かを考えることができた。歴史を学ぶだけでなく、歴史から学ぶというまなび方がより向上したように思う。

②課題について

●より効果的な単元の設定

今回、単元の構成の仕方は非常に悩み、課題も残ったと思っている。見ル目原一揆を教材化する際、どのように教材化すべきか迷った。今回は、教科書内にある単元の中身を補うような形で配置し、ねらいに向かえるように配置したが、初めから「見ル目原一揆」を単元の軸となる教材にし、それにつながるように教科書の中身を学んでいく、その方が地域に根差した学習になるのではないかと思った。今後、教材化する際に、ESDの学びによりつながるように工夫できるようにしていきたい。

●史料の吟味

今回、「上山史」の学習ということで、史料を発掘することを意識した。その結果、当時の打ちこわしや一揆の様子をまとめた「五巴神社由緒」を手に入れ、授業に活かすことができた。だが、これは文字だけの資料であり、具体的な場面をイメージしにくくなってしまった。当時の様子を描いた絵図などを見つけ、それを子どもたちに提示すべきであった。また、当時、この打ちこわしや一揆に参加した人物の書状等、一次資料等も見つけることで、当時の人々の思いなどをよりリアルに感じさせる必要があったと思う。今後、史料の発掘・作成・吟味により力を入れていきたい。

【考察】学習を通してのM児の考えの変容

M児は、周りに目を配れる優しい女の子である。困っている人がいたら助けたり、自分の意見を話すときには相手の立場を考えて伝わる言葉を吟味したりする子どもである。だが、4年生のころは、そのような今の姿からは全く想像できないくらい、周囲に荒い言葉を使ったり、自分の思い通りにならないことがあったら泣いてしまったり、ということがあった。本人曰く、周りの人のことを大事にしたいのだが、自分のことも大事にしたい、そして、主張の仕方がわからない、だから、不器用な付き合い方になってしまった、とのことである。

そんな彼女は、この学習に初めから関心をもち臨んでいた。初めに、「五巴神社由緒」を読んだとき、M児は、「こんなことが、上山でもあったんだ。」と衝撃を受けた発言をしていた。そして、「なんか、藩も藩だけど、百姓も百姓な気がする。」とも話した。その理由を尋ねると、「藩は何もしないのは酷い。でも、武器を持って何とかさせようとする百姓にも、もっとほかの手段があったのではないか」と考えていたことが分かった。彼女は、「藩が政治で何とかすべきだ」という視点だけでなく、「百姓の主張の仕方の『正しさ』」にも目を向けている。社会というのは、誰かが創ってくれるものではなく、様々な立場の人が互いのことを考え合って、その上で自分がすべきことを行うことで創られる、という視点をもっていると捉えられる。

その後、学習を進めていく中で、当時の社会は、幕府や藩が絶対であったこと、百姓が自らの意見を上訴するには命を落とす覚悟がどうしても必要だったことを子どもたちが学ぶと、M児は、「藩の人も、きちんと百姓の意見を聴いて、百姓の人も武器をもたずに話し合わなきゃ平和な世の中にはならないのではないかな」と考えるようになった。平和な世の中を創るためには、それぞれの立場の人が自分のことだけを考えるのではなく、相手のこと、世の中のことを考えていくことが大切であると捉えるようになっていた。

M児はこの学習を通して、「世代内の公平性」を実現するためにはどのように考え、行動していくべきかを上山市の打ちこわし・百姓一揆から学んだと考えられる。これは、以前は他者とのかかわり方がわからなかったが、次第に克服していったM児だからこそ行き着いた学びであると考えた。世の中には様々な立場や価値観の人がおり、それぞれが異なる事情を抱えて生きている。そのような中で、誰もが幸せを感じ、平和に生きていくためには、相手のことを思いやり、対話を重ねていく必要があるということをもM児は上山の打ちこわし・百姓一揆から学んだのだろう。

このような学びをより深め、誰もが幸せになる社会を創るために自己の生き方を考えて行動したり、社会に働きかけたりすることができる人間になってほしいと考えた。

現在の学年終了時に目指す姿

今自分たちが住む上山市についての理解を深め、愛着をもつとともに、社会の担い手としてよりよい上山市を創り、次世代の人々も幸せに過ごせるまちづくりを考える子ども。



【社会】町人の文化と新しい学問

- 江戸時代には、町人が文化の担い手であることを学ぶ。そのことから、当時の町人は自分たちのくらしをより豊かにしようとする行動をしていたという姿勢を感じ取るようになる。
- 上山市にも、町人の中には民衆を代表して藩に自分たちのくらしをより良くしようとする者たちがいたこと、民衆の思いをくみ取ろうとした藩の役人がいたことから学ぶ。そのことから、自分たちのくらしをより良くしていこうとする思いを持つ人々と、その思いを調整し、形にしようとする人がいてまちづくりはできていくことを捉える。

現状を受け入れるだけでなく、「おかしい」「こうしたい」と思って行動することで、何かが変わるのかもしれない。

総合的な学習の時間

よりよい上山市をつくるために

- 主に養いたいESDの資質・能力
- クリティカルシンキング
- 上山市の課題を見出し、それを解決するための方策を考えていく。
- 長期的思考力
- 次世代にも上山市の良いところを引き継ぐにはどうしたらよいかを考える。
- 主に育てたいESDの価値観
- 幸福感を大切にすること
- 全ての市民が幸せになるように自分はどう行動していくかを考える。
- 世代間の公正
- 自分たちだけでなく、次世代に生きる人々にとっても上山が住みやすい町になるよう行動していく。

【国語】みんなで楽しく過ごすために

- 自分が考える「よりよい暮らし」を、他者が考える「よりよい暮らし」とすり合わせることで、より多くの人が幸せになる暮らし方を考えることができるようにしたい。そのため、互いの考えを尊重しあう態度や、互いの考えを伝え合うためのスキルを身に着けるようにする。

「よりよくなりたい」気持ちは自分だけが持っているわけではないんだ。

【社会】わたしたちの生活と政治

- 現代では、市民の思いをどのようにして実現しようとしているのか、その仕組みを学ぶ。そのことから、自分たちの思いを実現するために、自分たちはどう行動するべきなのかを知る。また、自分たちのくらしをよくする政治に参画する態度を身に着ける。

自分たちの意見を、請願や選挙を通して表現していくことができるんだ。